

法政大学

EToS

江戸東京研究センター
Hosei University Research Center for
Edo-Tokyo Studies



東京発掘プロジェクト2023 千代田レジェンド・リノベーション

法政大学江戸東京研究センター 編
皆川 典久 監修

東京発掘プロジェクト 2023

千代田レジェンド・リノベーション

INDEX

「千代田レジェンド・リノベーション」とは？		皆川典久
1.溜池の再生	23U1139 23U1142 23U1118	福田美里 藤本葉月 小瀬木駿
2.水道の更新-溜池山王・赤坂見附	23U1130	徐志敏
3. 鎌倉河岸における遊楽空間の再生	23U1129 23U1128	城島杏友 白井萌々子
4. 水辺空間-交通・交流の節点	23U1110 23U1132 21U1301	WANG JIAYU CHEN LANGCONG LEE HYEONSEOP
5. 総武中央ボートライン構想	22U1306	山田明子
6. 道三堀の復興	22U1304 22U1302	張耀芸 蔣睿

東京発掘プロジェクト2023

「千代田レジェンド・リノベーション」とは？

1. 研究の背景と目的

2018年より法政大学デザイン工学部で開講している都市解読方法特論「東京発掘プロジェクト」では、東京の足元に眠っている暗渠（かつての水路や川）や埋められた掘割を発見（発掘）し、仮想的に現代都市空間に組み込むことで、「水の都」とも称された東京のオルタナティブな未来像を提案する試みを続けてきた。

2023年度は千代田区地域振興部が選出した「令和5年度千代田学事業」の一環として、「まちを博物館に！～千代田レジェンド・リノベーション」を表題に掲げ、半年間の研究活動を行った。本冊子はその「作品集」である。

東京・千代田区の地下にも歴史的遺構（レジェンド）が数多く眠っている。例えば江戸城城壁や見附跡、そして川や運河など水路の遺物などである。そうした遺構を見つけ出し、仮想的に再生（リノベーション）させることで、千代田学のテーマのひとつ「ウォーカブルなまちづくり」に寄与する提案を目指すこととした。

2. 活動内容

歴史的遺構（レジェンド）を見つけ出すための基礎的研究として、江戸時代に描かれた図版や絵図、そして明治期以降に製作された古地図を参照した。遺構を再生（リノベーション）させる意義については賛否両論あったが、懐古趣味に留まることなく、地域資源として積極的に位置づけ、まち自体を博物館に見立てることでウォーカブルなまちづくりを目指す手法のひとつとして有効であろうと結論づけた。さらに水路や堀の復活は、非常時の輸送路確保など防災面でも有効性であり、未来志向な方向性を確認した。

現地調査を4回実施し、机上では得られない情報を収集し、研究を深度化させるモチベーションに繋がった。2024年1月20日には法政大学市ヶ谷田町校舎にて、成果発表会を公開で行い、学生以外に一般からも60名を超える参加者があった。「水辺があれば広場のように人が集まり、新たなパブリックスペースの創出になる」、「新名所はオーバーツーリズム対策としても有効」、「このような取組を千代田区以外でも行ってほしい」などの意見が寄せられた。

研究の成果をきっかけに、ウォーカブルなまちづくりへの関心が高まり、自分たちの町の将来像を議論するムーブメントになることを願う。この取組みは産学官の連携によって、実践的な活動を触発する起爆剤になり得ると確信している。



2023年3月 研究代表者 皆川典久

溜池の再生

福田美里 (23U1139)

藤本葉月 (23U1142)

小瀬木駿 (23U1118)

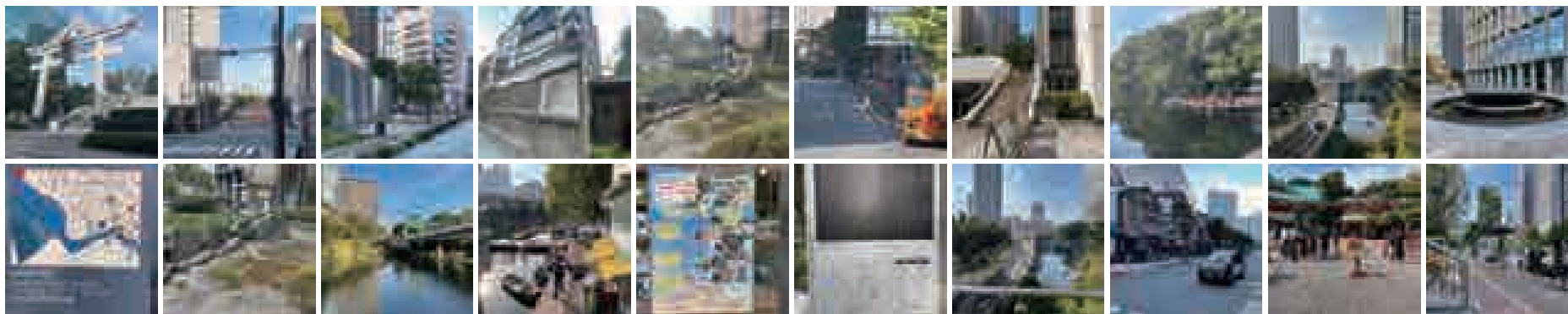


参謀本部五千分一東京図測量原図（明治17年）をカシミール3Dで加工



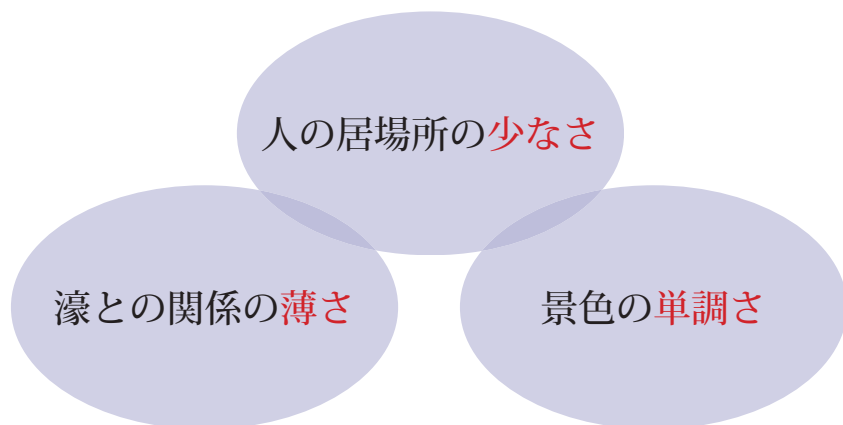
■ 地域調査

まず、千代田区の水辺の調査として、永田町から虎ノ門にかけて歩いていった。そして、そうした調査のなかで私たちは、**"地図上では見えない街の様々な特徴や活動"**を発見することができた。



■ 地域調査 結果

地域調査から浮き上がってきた3つの**課題点**



提案

都市の**文脈**から水辺を**再生**させることで
新たな人の**居場所**を創り出す

東京にかつて存在した風景を取り戻すことで
これらを解決することはできないだろうか

■敷地



江戸時代初期に、人工的に作られた溜池があった場所である、溜池山王を敷地に選定した。

古地図と現代の地図を重ねることで、かつてあった外堀と溜池の位置の調査を行った。現在、商船三井の本社となっている虎ノ門ダイビルと、虎ノ門三井ビルが建っている三角形の敷地に、江戸時代の外堀と溜池の水辺の風景を再編する。

参考：大江戸今昔めぐり / 時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」

■溜池山王の歴史



▲唯一の名残である溜池の石垣

今回の敷地として選定した、虎ノ門三井ビルディング前の公開空地に残されている。石垣の歴史が記された案内板が設けられているが、歩行者がこの場所を通り過ぎる際、溜池の遺構について意識することはほとんどないと感じる。

・「溜池」の由来

江戸時代初期に造られた人口の池「溜池」。溜池は汐留川上流の清水谷と、太刀洗川をせき止めて作られた。清水谷と大刀洗川は日比谷入江に流れ込んでおり、文禄元年頃から日比谷入江が埋め立てられ、慶長 11 年頃には外堀とともに、2 つの河川の河口付近に堰を築き溜池となった。

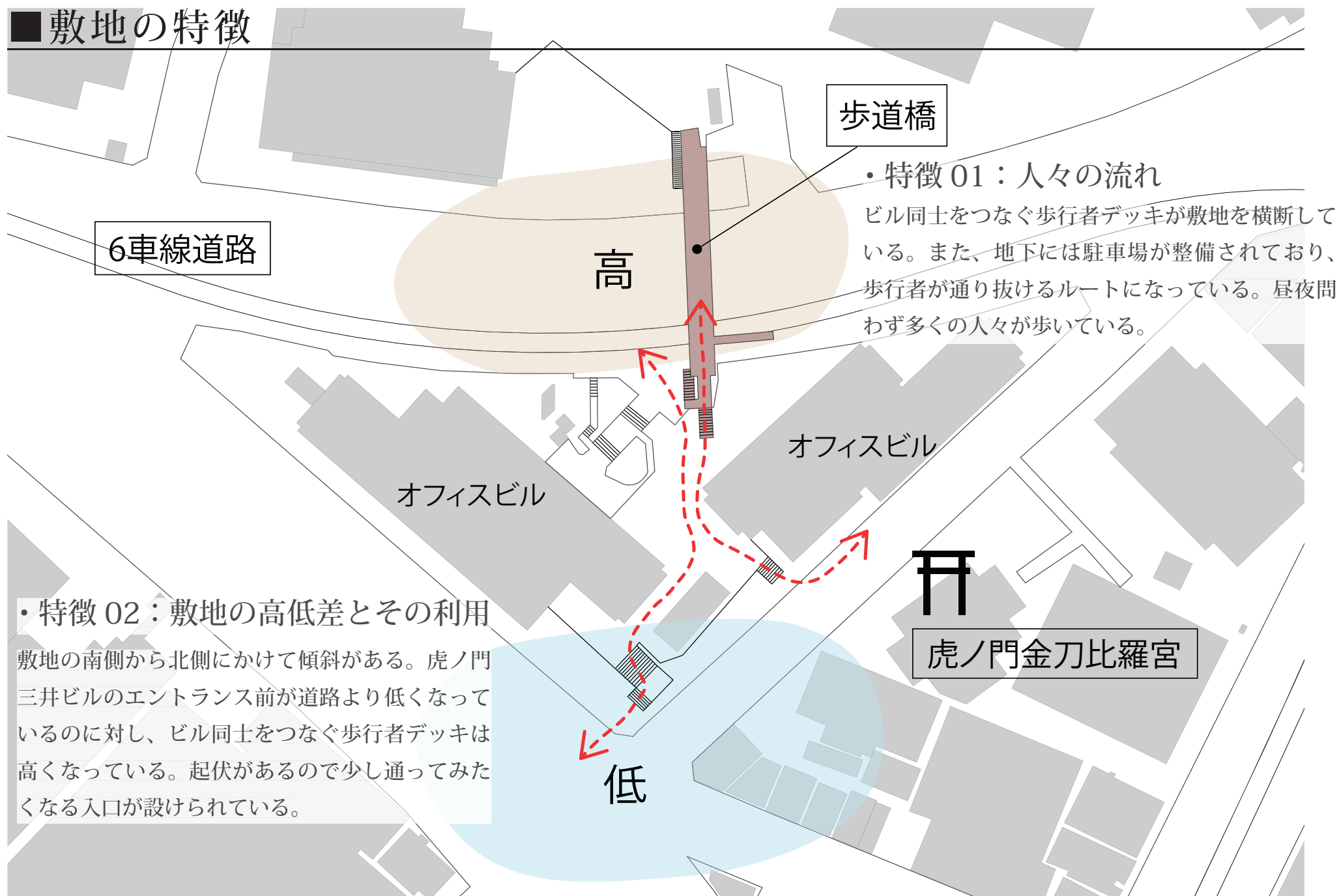
・「山王」の由来

永田町にある「日枝神社」が江戸時代に「山王権現」と呼ばれていたことに由来している。山王権現は家康が江戸を創る前からあり、地域に大切にされていた神社である。1657 年の大火の後、赤坂溜池際松平忠房の屋敷跡に再建され現在に至っている。

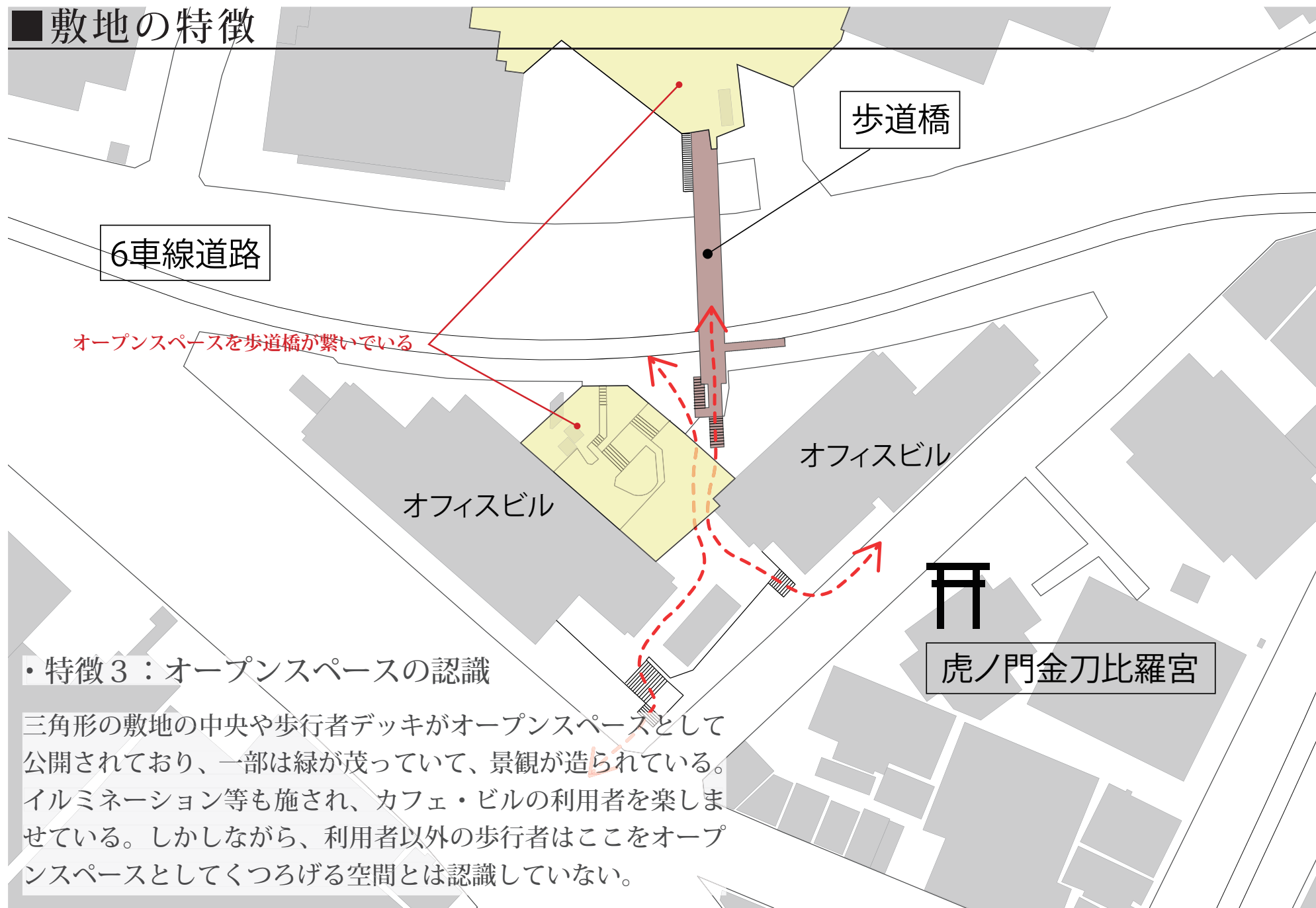


江戸名所百景の虎ノ門外あふひ坂

■ 敷地の特徴



■敷地の特徴



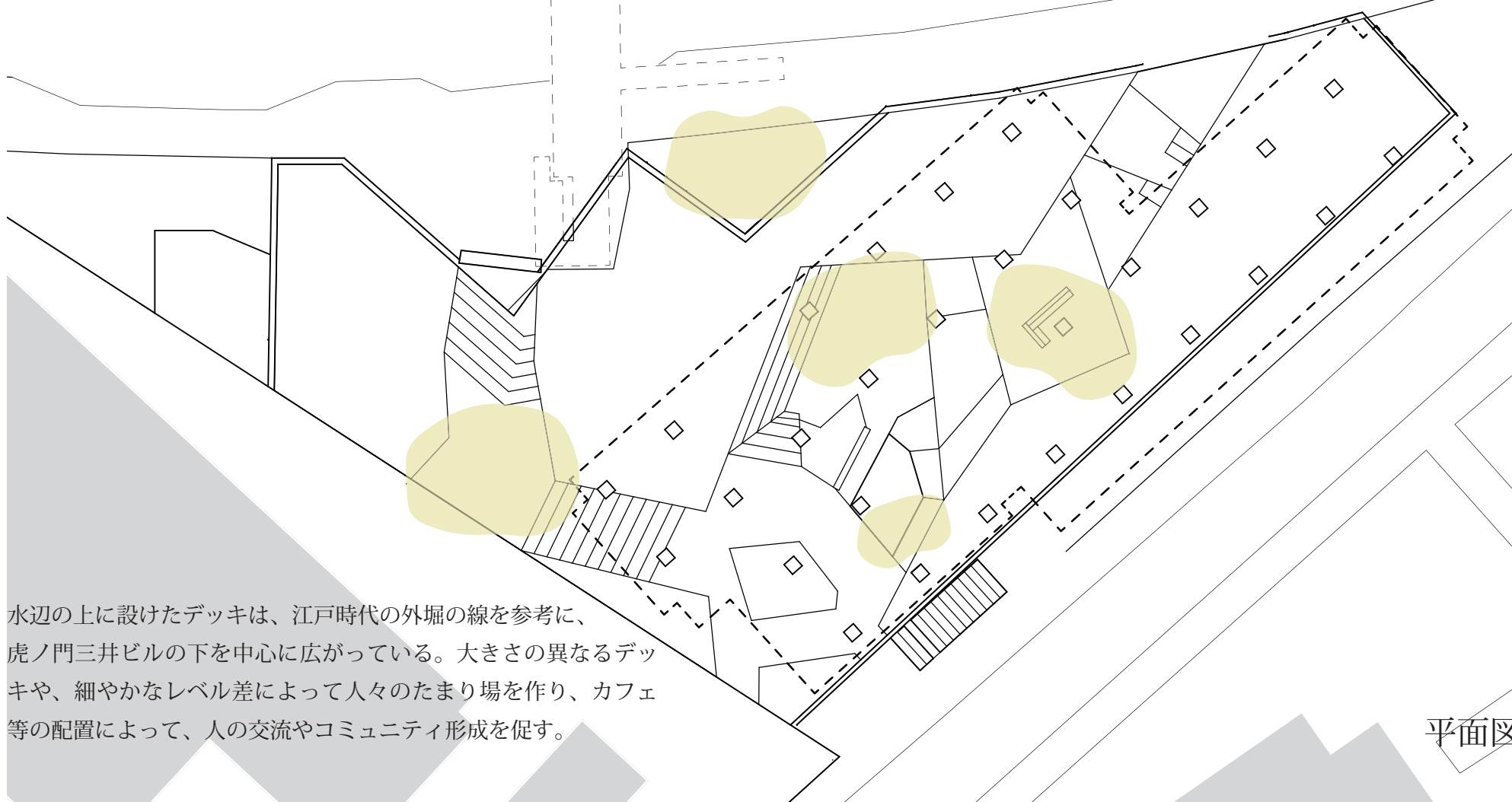
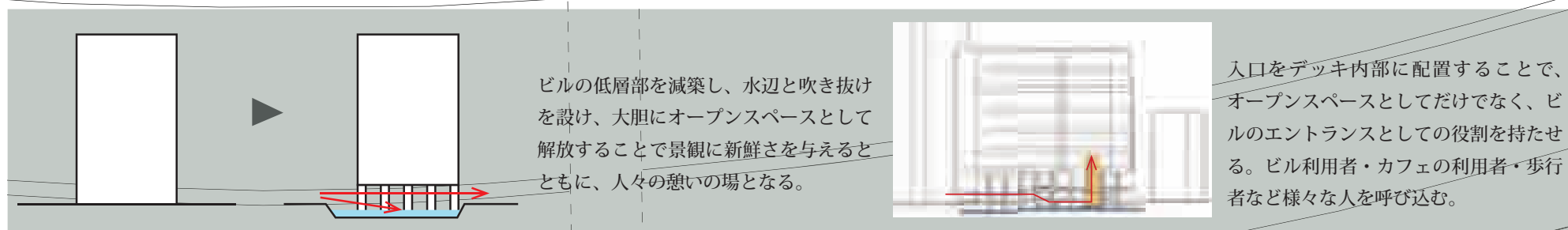


デッキに設けた緩やかな階段は、水との距離を近づけ、人々が思い思いに過ごす事ができる。



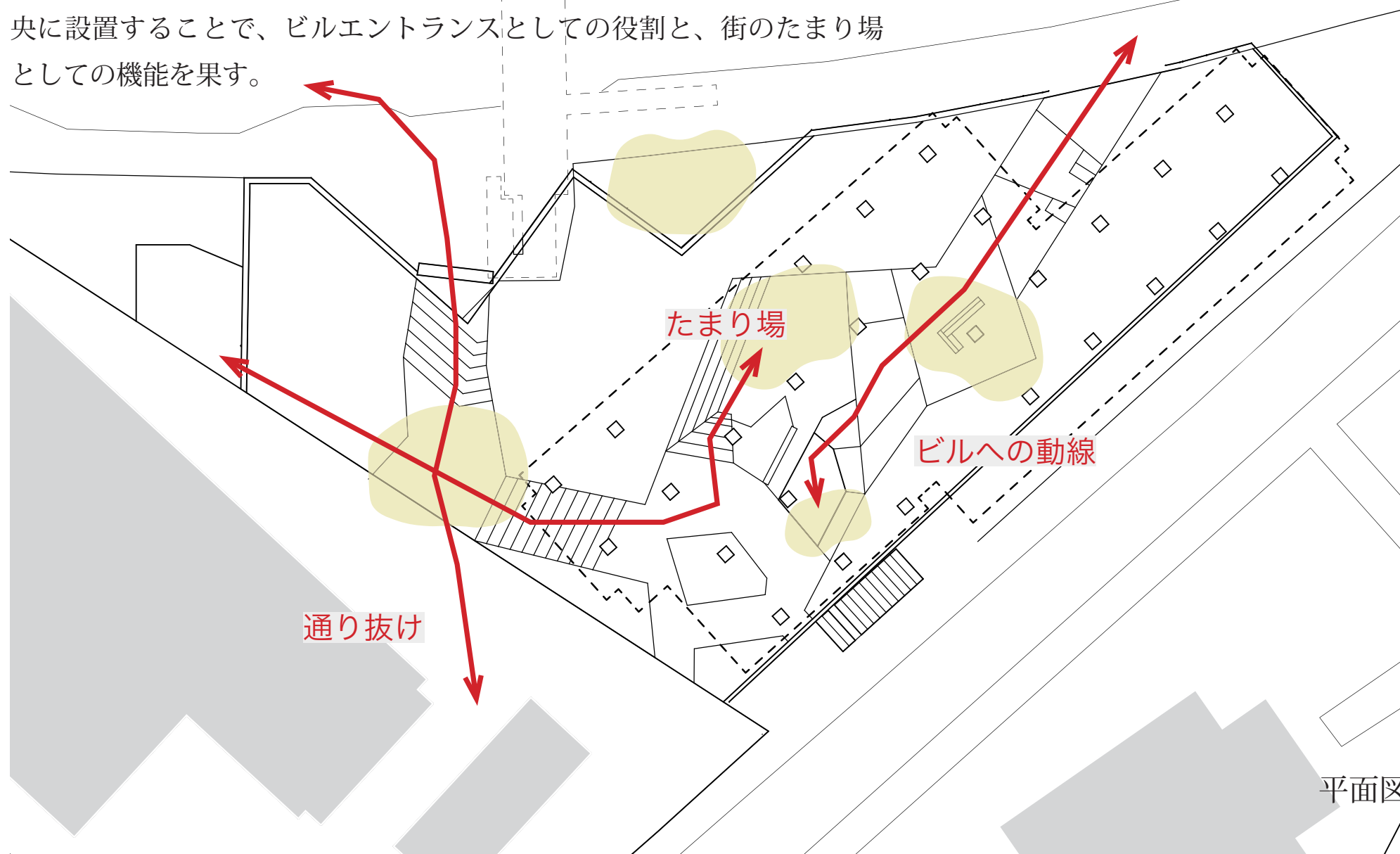
浮世絵で見られたような上り坂と滝の景色を現代の風景として再編する。

■提案 ビルを減築し、連続的な親水空間をつくる



■いきいきした水辺の道

改築前にあった通り抜けの動線は改築後も確保し、より快適に、より気分よく過ごせる空間を提供する。カフェの配置や、ビル入口をデッキ中央に設置することで、ビルエントランスとしての役割と、街のたまり場としての機能を果たす。



平面図



ビルに設けた吹き抜けによって人々の視線が交差し、立体的なにぎわいを生む。



現代版江戸名所百景の虎ノ門外あふひ坂

水道の更新 - 溜池山王・赤坂見附

徐志敏 (23U1130)



参謀本部五千分一東京図測量原図（明治17年）をカシミール3Dで加工



水道の更新—溜池山王、赤坂見附

23U1130 徐志敏

溜池山王という地名は存在しませんが、溜池の地名はかつて存在していました。由来は、江戸時代初期にこの地に作られた人工の池「溜池」にあります。

溜池山王の歴史

赤坂見附から虎ノ門に至る「外堀通り」は、かつては、「溜池」とよぶ、外堀兼用の上水源でした。

長さ1.4km、幅45m～190mといった大きさで、かなり細長い池でひょうたん池とも呼ばれていました。

溜池は、この辺りを流れていた汐留川上流の清水谷(紀尾井町のあたり)と、太刀洗川をせき止め作られました。

下の浮世絵を見ればわかるように、溜池には大きな高低差がある。同時に、豊かな水系がこの地域の急速な発展につながった。

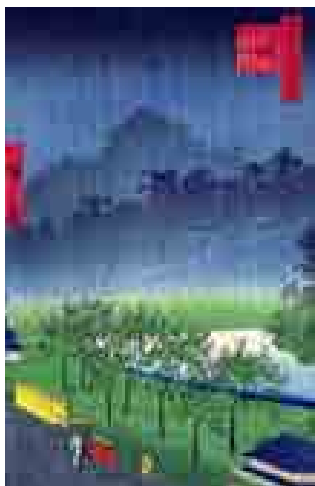


図1



図2



図3

図1：「名所江戸百景」

図2：「東都名所づくし之内 葵阪之図」

図3：「江戸名所図会」

溜池山王水道の現状



江戸城は内堀と外堀の二つのお堀に守られていました。内堀は現在とほぼ変わらないものですが、外堀は埋め立てによって溜池山王や鍛冶橋といった名前を残すのみの場所も多くあります。現在の市ヶ谷ー四ツ谷ー赤坂見附ー溜池山王ー内幸町…と続く外堀の水路です。

形成

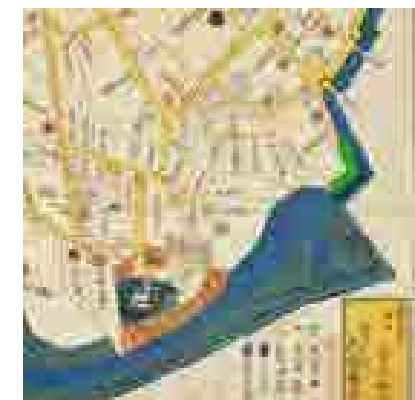
・慶長11年(1606)に完成したこの巨大なダム池は、浅野幸長によって造られた。江戸初期の上水(飲料水)と防衛上の外濠を兼ねて造られた。

衰退

・宝永4年(1707年)と享保年間(1716～1736年)、その一部が埋立てられました。

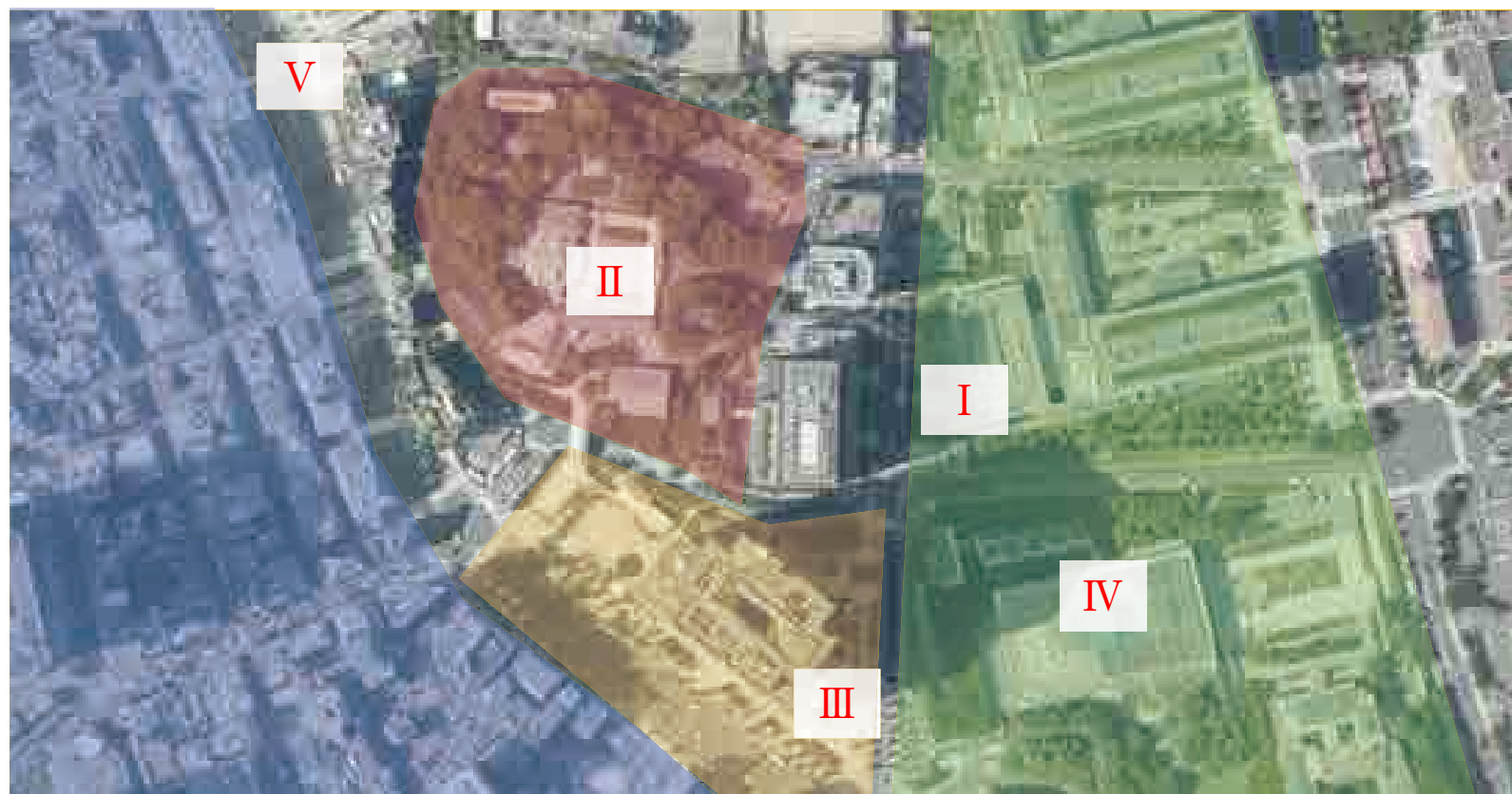
廃棄

・明治8年頃(1875年)から本格的に埋立てが始まり、地形そのものは、溜池の状態をほぼ正確に留めている。



江戸切絵図外桜田永田町絵図

現状分析



- 経営区域
- 政治区域
- 宗教区域
- 設計区域

この設計の敷地は山王パークタワーの周辺にあり、北側は神社区域、西側と南側は商業区域、東側は政治区域に囲まれている。

I 国会議事堂



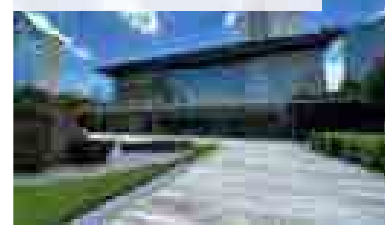
II 日枝神社



III 溜池山王駅



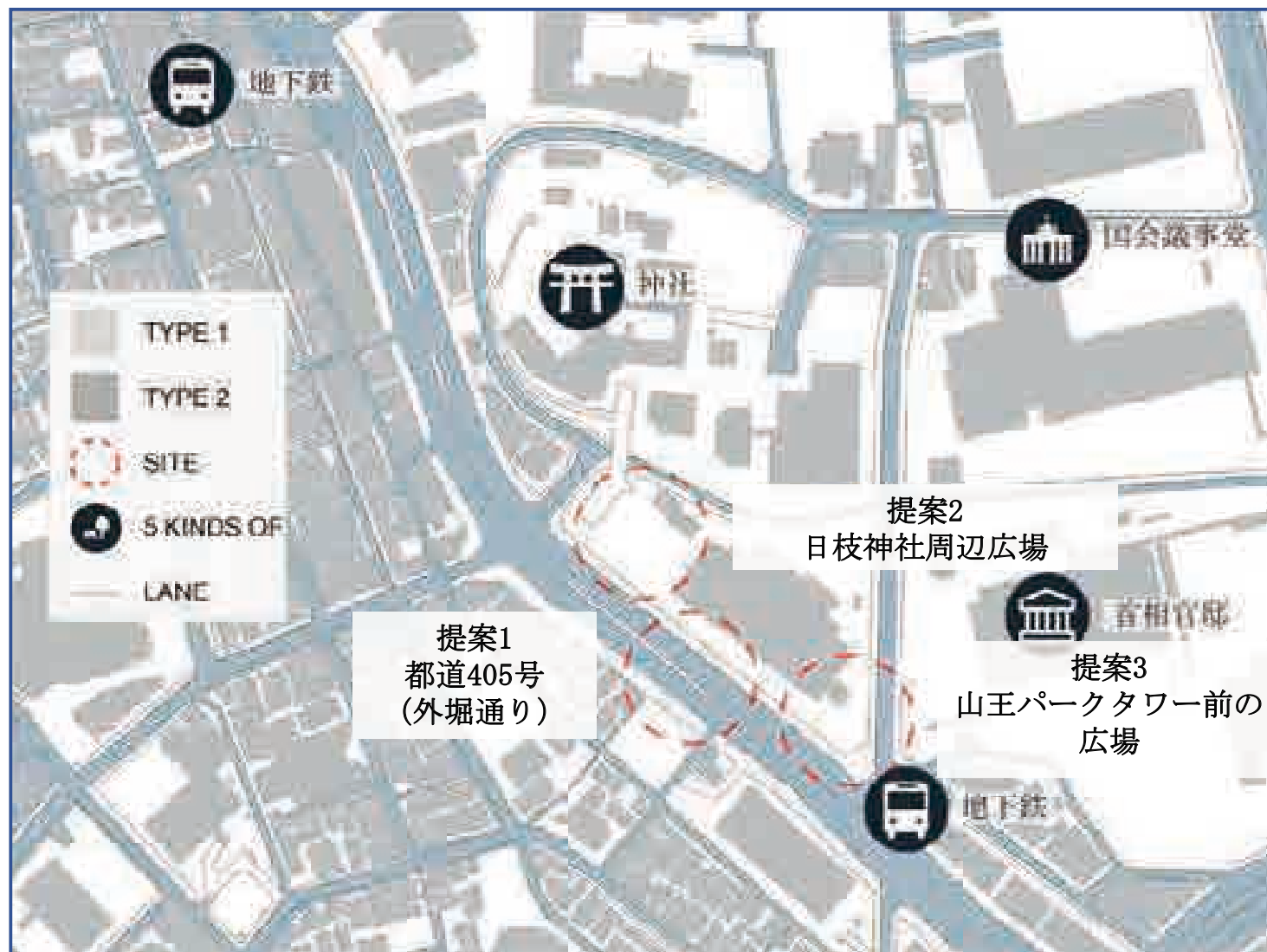
IV 首相官邸



V 赤坂見附駅



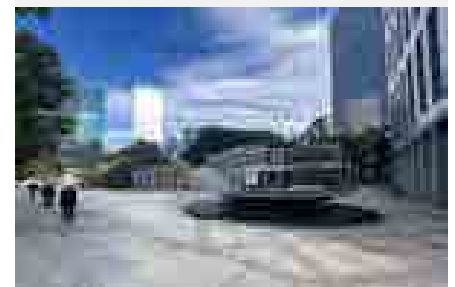
対象地域



提案1
都道405号 (外堀通り)



提案2
日枝神社周辺広場



提案3
山王パークタワー前の交差点



対象地域

選定理由

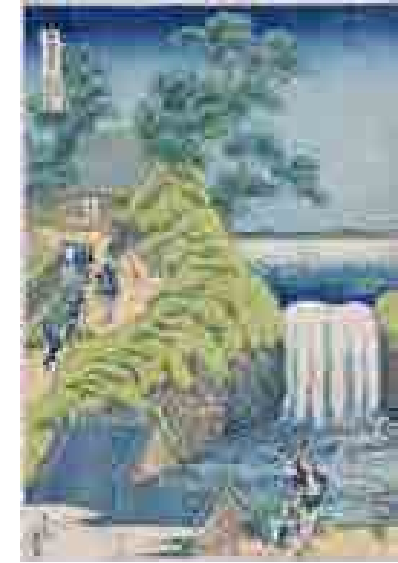
- 1、商業地区なので、近くに憩いの水辺空間がない。
2. 道路に少し緑があるが、完全な生態系を形成していない。
- 3、広場が合理的に利用されていない。
- 4、八車線は広すぎるし、有効活用されていない。

目的

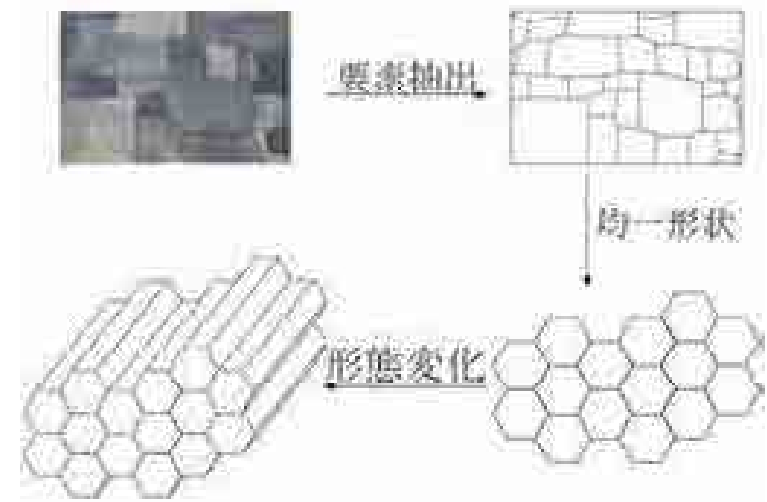
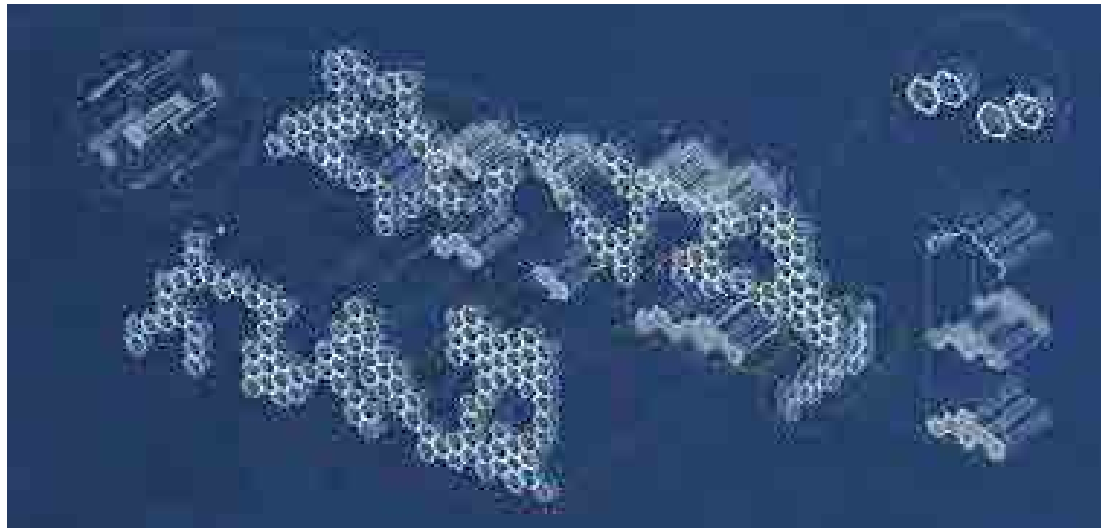
溜池水系の繁栄を再現すること。

全般的な改造方法

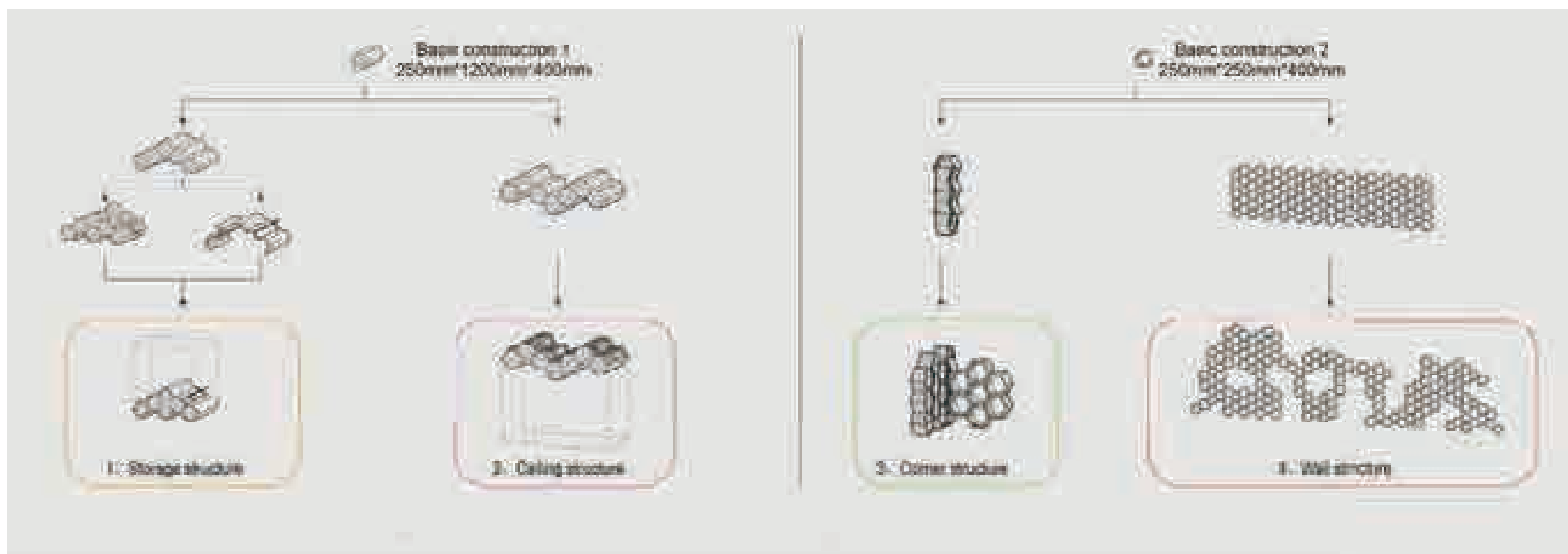
単体景観装置のデザインは、歴史的に抽出された遺跡の要素と、3つの候補地に基づいた専門的な敷地設計に基づいている。



「諸国瀧廻 東都葵ヶ岡の瀧」



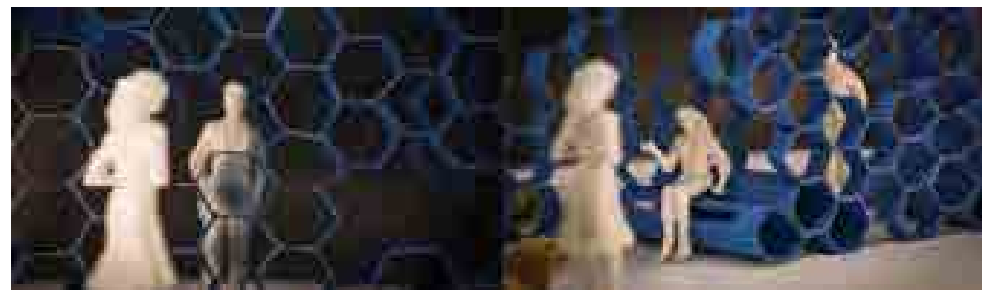
単体景観装置の分析



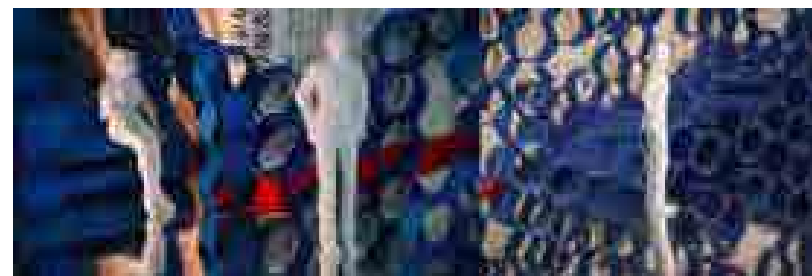
単体景観装置の模型製作



模型の表現を通して、この景観装置を利用する人々の活動の機能が十分に発揮されている。



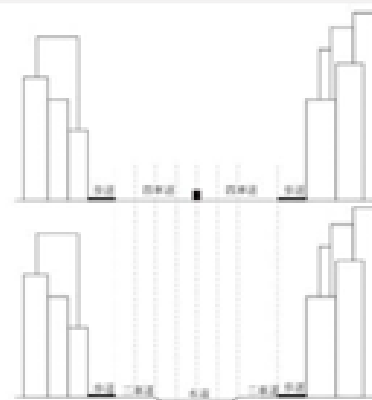
人々が立ったり休んだりするのに十分なスペースがあり、人々の活動を十分に満足させることができる。同時に、六角形の空間を通して、周辺の見知らぬ人々との良好なつながりを持つことも可能である。人々のさまざまな生活形態が十分に考慮されている。



提案1 都道405号（外堀通り）

改造方法

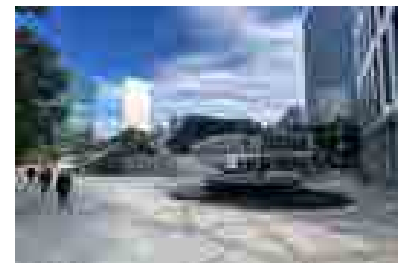
- 1、元の8車線を6車線にし、真ん中の2車線を水辺の景観にする。
- 2、遊歩道沿いの景観を整える。



提案2 日枝神社周辺広場

改造方法

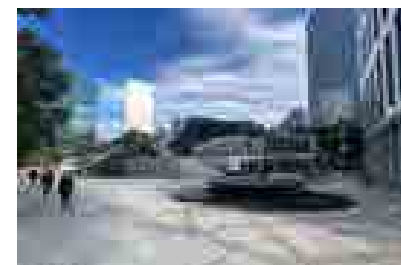
- 1、広場を充実させ、憩いの場を作るためのデザイン。
- 2、近隣神社との統合。



提案2 日枝神社周辺広場

改造方法

- 1、広場を充実させ、憩いの場を作るためのデザイン。
- 2、近隣神社との統合。



提案3 山王パークタワー前の交差点

改造方法

- 1、信号の前に休憩できる場所を設計する。
- 2、高層オフィスタワーに休憩場所を提供する。



鎌倉河岸における遊楽空間の再生

城島杏友 (23U1129)
白井萌々子 (23U1128)



参謀本部五千分一東京図測量原図（明治17年）をカシミール3Dで加工



鎌倉河岸における遊楽空間の再生

-敷地-



鎌倉河岸



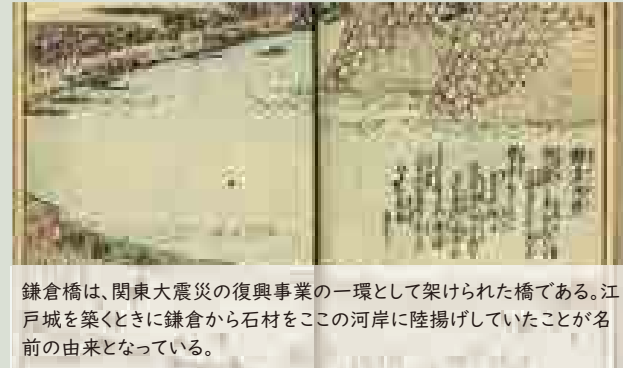
神田橋ー鎌倉橋間は鎌倉河岸と言われ、魚や青物等の生鮮食品や木材や石材の荷上場となり、水上の交通のターミナルとして賑わっていた。
くわえて鎌倉河岸周辺には遊郭が多くあったことから、江戸遊郭発祥の地ともされており、**花見や花火、月見や芝居等を船の上から楽しむ遊興空間**であった。
高度経済成長期にはオフィス街として開発が行われ現在は高層ビルが建ち並ぶが、一部遺構が残されている。

神田橋



神田橋は、当時の江戸城外郭門の1つであり、上野寛永寺や日光東照宮へと続く御成道であった。重要な場所であったことから、明治ごろまではこの辺りに建造物がなく、見晴らしのよい場所となっていた。

鎌倉橋



鎌倉橋は、関東大震災の復興事業の一環として架けられた橋である。江戸城を築くときに鎌倉から石材をここの河岸に陸揚げしていたことが名前の由来となっている。



-背景・課題点-

江戸時代の遊楽空間

近世において、盛り場、演劇空間（芝居小屋）、遊興空間（遊郭、岡場所）、行楽空間（名所）など、レジャーやレクリエーションのための空間を遊楽空間と総称する。このような空間は人々が普段暮らす場所とは一線を画し、異世界性、非日常性を持っていた。それと同時にこういった空間に入ることによって人々は気持ちを切り替え、様々な情緒を楽しんでいた。



落合芳幾「隅田川花の賑わい」



延一「美人隅田川花見の図」



鳥居 清長画「角田川月見船」

このように江戸時代には船の上から花火、花、芝居を楽しむなど、船と文化が密接に関係していた。その後陸上交通が発達したことで忘れ去られ、むしろ縮小・制御されてきた水上空間であるが、過去を顧みると人々の心的環境に大きな影響を及ぼすことのできる空間となるのではないかと考え、当時の遊楽空間を現代に合った形で水上に再生することを提案する。



広重「名所江戸百景 両国花火」

* 前提条件 *

数十年後の鎌倉河岸を想定している本提案の前提条件として以下を設定した。

- 1, 河川、また本敷地内においてそれぞれ浄化・循環設備が整っており、水質は人が入水できる程度であること。
- 2, 敷地上部を走る高速道路が撤去されいること。（現在、実際に日本橋区間地下化事業により 2040 年に撤去される計画がある）

課題点

課題1 緑道の活用

○のエリアには現在大手町川端緑道があるが、川とあまり関わりのない緑道空間になっており、遺構が活用されていない

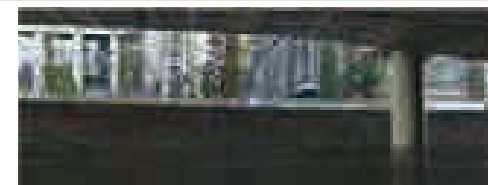


課題2 利用者の偏り

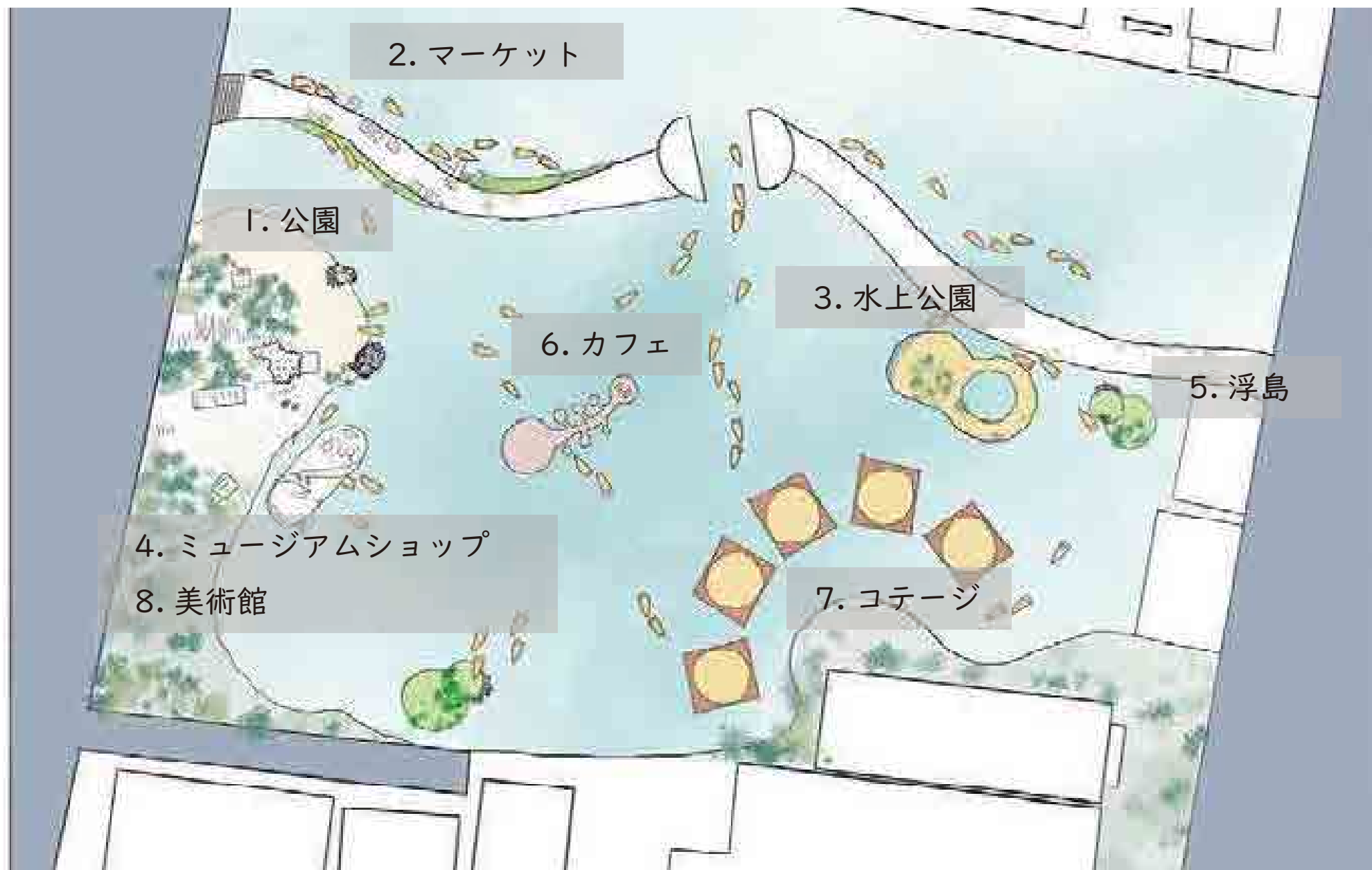
大手町という場所性から周辺にはオフィスビルが立ち並び道行く人々のほとんどが働く人々である。加えて神田地域への来訪者特性のパーソントリップ調査において、レクリエーションや食事などの私用による来街者数が周辺地域と比較して最も少ないとの結果が出ている。

課題3 河川との断絶感

水面と歩道の高低差が4～5mほどある為、人と川が断絶された印象を受ける。



-提案・配置図-

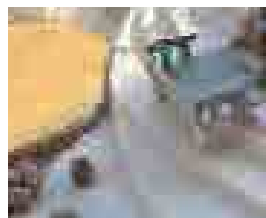


-提案-

1. 公園 ～遠景を堪能する～



道路側からアクセスでき、滞在性の高い公園。多くの人の休憩場所となる。



2. マーケット ～水と接する緑道空間～

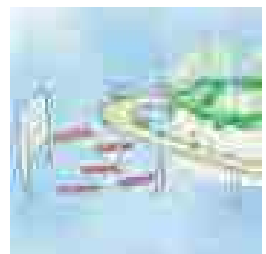


物流のハブであったこの地を現代に復元。通り過ぎる人、買い物をする人、物売る人が行き来することで新たな活気生まれる。また、市場を設けることで様々な人が目的を持ち訪れる場となる。

3. 水上公園 ～水陸共存の交流場～



船に乗らずにアクセスでき、水上からも陸上からも参加できるイベントを開くことができる。



4. ミュージアムショップ



公園から繋がるミュージアムショップ。

-提案-

5. 浮島でゆったり



6. カフェ



船で行くカフェ&バー。あえて個室のみにすることで特別感を演出。

7. コテージ ～水上生活体験～



水上に泊まるコテージ。船だけで生活するここ에서만できる体験を提供。

8. 美術館 ～これまでにない体験～



船でめぐる美術館、内部では船を停めて降り立ち美術品に近づいて鑑賞できる。

ー今後の鎌倉河岸ー

1から8まで段階的に水と近くなっていくアクティビティを通して、忘れ去られていた水辺空間が新たな風を通し再び人々が行き交う遊楽空間としての水辺となる。



水辺空間 - 交通・交流の節点

WANG JIAYU (23U1110)
CHEN LANGCONG (23U1132)
LEE HYEONSEOP (21U1301)



参謀本部五千分一東京図測量原図（明治17年）をカシミール3Dで加工

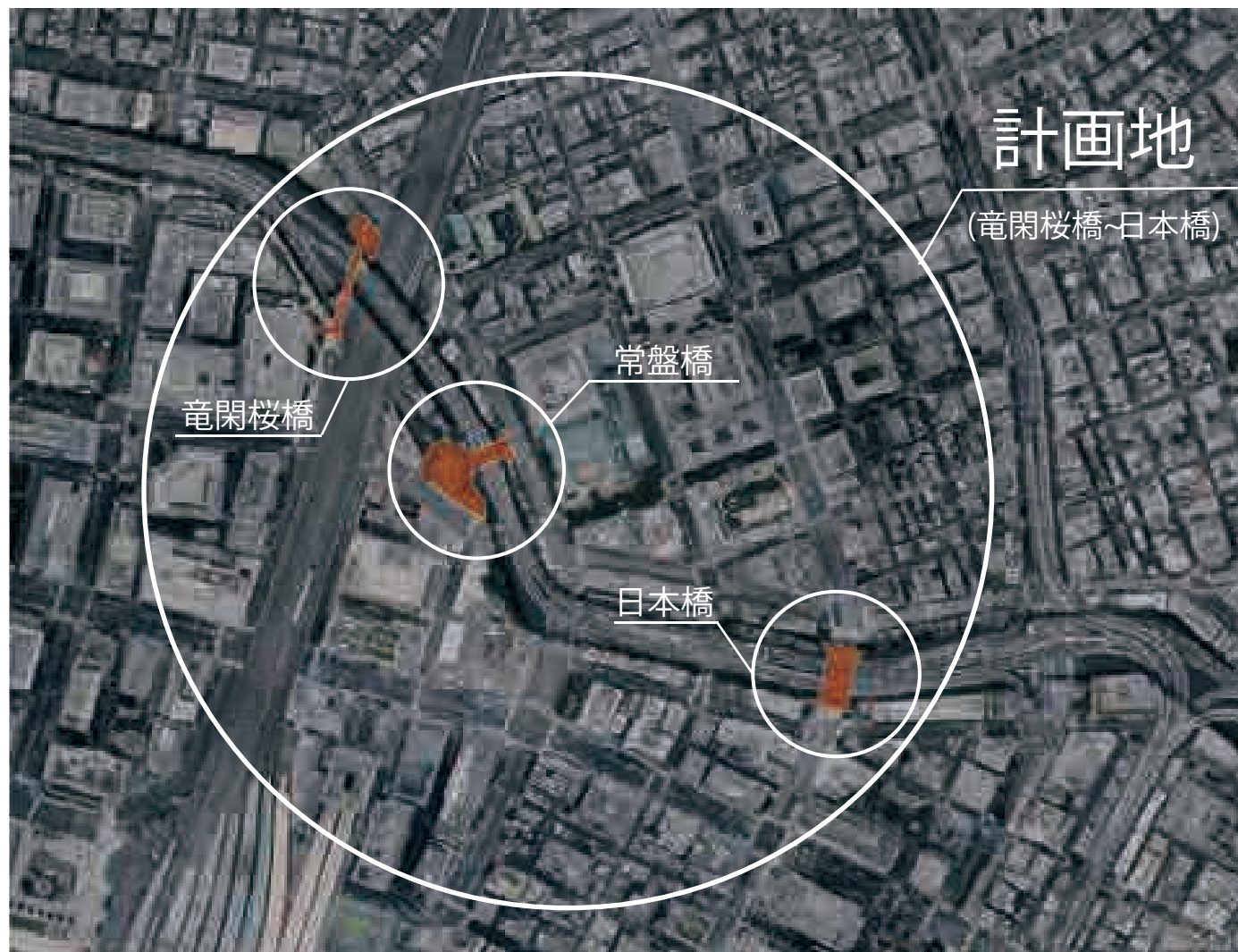
かつて、日本橋は五街道の起点として海や川に恵まれ、陸路より水陸の要衝として繁栄していた。

しかし、都市インフラや河川の整備など、旧時代のインフラを刷新する都市開発が行われ、様々な交通インフラが重層的に重なる日本有数の地点と認知されるようになったが、日本橋における河岸の機能は衰退しつつある。



水辺空間 -交通・交流の節点-

21U1301 LEE HYEONSEOP 23U1110 WANG JIAYU 23U1132 CHEN LANGCONG



選定理由

日本橋川は、江戸時代から経済・交通・文化の中心地として栄え、今日に至るまで歴史的価値を残している。また、竜馬桜橋から常盤橋、日本橋にかけてのエリアはいくつ人を集める広場が設置されている。再開発構想のランドマークとなるエリアである。

首都高速道路によって景観が破壊された日本橋川は、現在、水辺の環境を改善し、観光地化する計画で再開発が進められている。

しかし、首都高速は交通基盤施設の一部であるだけでなく、将来、歴史遺産として保存し、直感的な歴史教育の場を提供する。あるいは、都市計画への記念となれるため、本計画は高速道路が水辺空間と周辺の場所を連結する役割を担い、今回計画の切口として工夫した。